

温故知新

十和田市郷土館資料から①



マカナイ

時代 昭和30年ごろ
 大きさ 長さ 118cm
 ゆき 61cm

「ギッタンボタン」

「トーントン」

寝静まっている夜中に、茅葺き屋根のどの家からも同じような音が聞こえてきます。

この音の正体は、農閑期の冬になると、マヤ（馬小屋）のマゲ（マヤの2階にある物置、今で言うロフトのような所）から機織を取り出し、女性が夜遅くまで織物をしている音です。南部地方の集落で昭和30年ごろまでこのようにして、織物をしていました。

写真は、当地方の普段着で「マカナイ」と言う衣類です。言葉の語源は、賄うが訛って「マカナイ」になったと言われています。60歳以上のかたなら小さいころ、着ている人を見たことがあるかも知れません。

材質は、藍で染められた「麻」で、昔から衣服の材料となっていました。明治のころは、自分で麻を栽培し、皮をはいで糸を紡ぎ、機で織って、藍で染め、春からの農作業などに使用する衣類を作りました。

一冬で大人の「マカナイ」を一着、早い人でも二着作るのが精一杯でした。よく見ると寒くないように内側が手ぬぐいで補強されていたり、首と袖部分には、継ぎあてがされているものもあります。また、丈夫にするため全面に糸留めをしていて、女性たちの手作りの苦勞をこの「マカナイ」の織目や仕立ての細かさから知ることができます。

問い合わせ先

郷土館 (☎065115)

芸術文化ゾーンだより ⑱ ～作品紹介⑦ 椿 昇～

市で整備を進めている野外芸術文化ゾーンについての話題を紹介しています。

特集でも触れましたが、いよいよ今月末に十和田市現代美術館がオープンします。先月号では屋外の彫刻作品として「フラワー・ホース」を紹介しましたが、今月はもう一体の彫刻作品「aTTa」を紹介しましょう。

この作品は京都府出身の作家椿昇によるものです。椿は1953年生まれ、現在、京都造形芸術大学で教鞭をとる傍ら、社会問題をテーマに人間の知性や感性を刺激する作品を発表し続けています。昨年、十和田市現代美術館開館のイベントとして、十鉄バスに昆虫をテーマにペイントするワークショップを行いました。

昆虫は椿の作品の重要なモチーフのひとつで、80年代後半からFRP（強化プラスチック）による巨大な生物の彫刻を発表しています。代表作に2001年の横浜トリエンナーレ（3年に一度開催される大規模国際展）でホテルの壁面に登場させた巨大なバッタのバルーン「飛蝗」があります。

この当館の作品について椿からのコメントが届いています。紹介しましょう。「コスタリカの熱帯雨林には、

有名なハキリアリ（学名：Atta sexdens）が生息している。彼らは細断した木の葉を発酵させ、その上に育つ特殊なキノコを食用とする極めて高度な農耕型社会を築いている。この作品は自然の多様性と文化の多様性を祈って製作した。」



問い合わせ先 現代美術館 (☎01127)